

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 萊 む し の 会
第 20 号 2025.11.10

安曇川水系流域のシコブチさん その 1

的場 亮一

昔から林道や人里離れた山奥をジムニーで走るのが好きで、カーナビもない時代だったので、昭文社の「山と高原地図」を助手席に広げながら、よく走っていた。1980 年代だったか 1990 年代だったか記憶があいまいだが、京都市左京区大原小出石から R477 をのぼり、とてつもなく急峻なこれでも国道？と疑ってしまう前ヶ畑峠を越え、百井川沿いを北に向かい大見、そして尾越に行ったことがあった。わずかにある民家もほとんど空き家になっていたが、その地域の自然環境が気に入り、その後数年おきに何度か訪れた。

毎回記録目的でたくさんの写真を撮っては PC に保存していたのだが、ある時まで使い慣れていない外付けディスクに保存操作をしていた時、ミスにより PC 側の写真と外付けディスクの両方の写真フォルダー 10 数年分を削除してしまった。

そのため正確な日付も、現地の写真も消えてしまった。たぶんあれは 2005～2006 年ごろのことだったと思う。その時は右に行けば尾越・小浜という大見の奥の三差路（図 1）で花脊峠・京都に通じる左に入ってみた。すぐに集落はすぎ、長いこと車も通ったことのなさそうな大きな石がごろごろしぬかるみもある狭い山道をゆっくり走っていると、右手の杉林の中に小さな建物らしきものが目に入った。何だろう？と車を止め見にいってみた。水のきれいな小さな川が流れて



図1 大見の奥の三差路

いて橋が架かっていて、そのすぐ奥にかなり古い高さ 3m ほどの小さな社が建っていた。大見のわずかな民家からもかなりはなれた山奥になんでこんな社があるのか、とても不思議に思い何枚も写真を撮ったのだが、それらをミスで削除してしまい、今はない。いろんな貴重な記録と思い出が消えてしまい、今となってはかえすがえすも残念。

帰宅後、調べてみたら、大見思子淵（シコブチ）神社という神社らしいことが分かった。しかも同様のシコブチ神社が滋賀県にもいくつかあるらしいことが分かった。神社の名前からして、なんとなくわけがありそうで興味がわいてきて、じっくり調べることにした

ネットで検索すると、シコブチ神社の情報がたくさん見つかったが、いずれもその社の場所やその社の外観写真などがほとんどで、安曇川流域に 7 社がある、筏流しの神を祀っている、といったレベルで、詳しい情報は得られなかった。しかし知りたい興味は相変わらずで、図書館で関連する本を探しては拾い読みなどで、さまざまな情報を単発的に仕入れていた。

このたびそれらを整理してみた。7 社は、京都市、大津市、高島市の安曇川水系流域に点在している。さらに祠も含めて 10 社が見つかった。それら合計 17 社を表 1 にし、位置を国土地理院の地図に赤丸で示した (図 2)。左下の緑丸は、最初にであった大見思子淵神社の建っている位置を示している。

表1 シコブチ神社・祠と立地場所

No	シコブチ神社・祠	立地場所
1	思古淵社	京都府京都市左京区久多宮の町
2	思子淵神社	滋賀県高島市朽木小川
3	志子淵神社	滋賀県高島市朽木岩瀬
4	思子淵大明神	滋賀県大津市葛川坂下
5	信興淵大明神(志子淵神社)	滋賀県大津市葛川坊村町
6	志子淵神社	滋賀県大津市梅ノ木町
7	思子淵神社	滋賀県高島市安曇川町中野
8	思子淵神社	京都府京都市左京区大原百井
9	思子淵神社	京都府京都市左京区大原大見
10	思子淵神社	滋賀県大津市葛川梅ノ木
11	思子淵神社	滋賀県大津市葛川町居
12	思子淵神社	滋賀県大津市葛川細川
13	思子淵神社 (跡)	滋賀県大津市葛川金山淵
14	思子淵神社	滋賀県高島市朽木平良
15	思子淵神社 (跡)	滋賀県高島市朽木能家
16	志故淵神社	滋賀県高島市朽木雲洞谷寮一(えべつ)
17	シコブチ神社	滋賀県高島市朽木雲洞谷大丸



図2 安曇川流域のシコブチ神社・祠

シコブチ神社にはいろんな表記がある。思子淵神社がもっとも多いが、ほかにも志古淵神社、信興淵大明神、志子淵神社、といろいろだ。推測だが「シコブチ」という発音は共通しているものの、遠い昔に文字で書き表す時にその土地土地でいろんな漢字があてがわれて、このような形で残っている気がする。どんな漢字をあてがうかは、その土地の住民たちの想いに基づいたのだろう。

それにしても、図 2 からわかるように、シコブチ神社は、安曇川と上流の葛川とそこに流れ込む百井川やそこに流れ込む大見川、針畑川や北川など、いかに川沿いに点在するかがわかる。この安曇川流域にだけ残るシコブチ信仰はとてもユニークな気がする。後述するが、地図で縮尺を下げてみるとわかるのだが、同じ安曇川流域といえども、興味深いことにシコブチ神社・祠があるところは安曇川や支流の淵や岩の多い難所や、支流の合流地点近くに多く見られる。

最近読んだ「京滋 びわ湖山河物語」(*1)で、シコブチの由来を知った。以下は P214 からの引用。『恩師池田末則先生から教えられたところによると、「シコ」やその転訛語の「チゴ」は、デゴク(地獄)の下略の転訛語で、そのありようは危険な淵・地獄淵と考えられるという。そういえば、保津峡嵐山の河流の複雑なところにあるチゴ(稚児)ヶ淵などもうなづける。うす暗く気持ちの悪いような山中に陸化したシコブチ神、たとえば吉野の奥地や京都の清水神社の近くにある薄ぐらい稚児ヶ池なども、「チゴ」、「シコ」の転訛語にふさわしい。』

そんなシコブチさんにますます興味が膨らんだ。2009 年 9 月に大見に行ったときは、百井町に入り安曇川の支流の百井川沿いに北に走ってまもなく右手の山中に少し開けたところがあり、獣のにおいがする家畜小屋らしき建物と人家らしき建物があり、なんだろう?と立ち寄ってみた。放し飼いの犬が数頭激しく吠えながら寄ってきて、これはまずいと思った瞬間、住

人らしき女性が大きな声で犬を制しながら出てきた。彼女に案内されて、大きないくつかの小屋を見学。たくさんのイノシシを何棟かの大きな小屋に飼っていて、かわいいウリ坊も数頭いた。驚いたことに体長1 m以上のツキノワグマも別の頑丈な檻で飼われていた。なんでも生まれた直後から抱いて牛乳をあたえそだててきたメスで、この時は17歳だそう。彼女には慣れているだろうが、爪や牙の鋭いクマを目の前で見るとビビってしまい、とても彼女のように餌をやることはできなかった。



図3 17歳のツキノワグマ

その頃は大見の集落（といってもほとんど空き家）に入る手前に、大きな古びた建物があった。調べてみると、なんと京都市左京区大原で小中一貫教育を行っている京都市立大原学院の分校、大原小学校尾見分校だった。尾越と大見を足して2で割った学校名。

表2 大原小学校尾見分校の歴史

1903年(明治36年)	大原専常小学校尾見分校として開校
1950年(昭和25年)	大原小・中学校尾見分校 開校
1973年(昭和48年)	休校、一時閉鎖
2018年(平成30年)	3月、廃校

写真は2016年に撮ったもの（図4、図5）。今から120年あまり前には、この地区にもたくさんの家があり子供たちも多かったのだろうが、とても想像がつかない。やはり当時は林業と農業で生計をたてていたのだろうか。なんと45年間も『一時閉鎖』の状態が続いていた事に驚いた（表2）。2012年1月の大見の様子がネット上に見つかった（*2）。参考になる。



図4 2016年の尾見小学校跡



図5 校庭のジャングルジムと太く育った樹

まだシコブチさんについてほとんど何も知識もなく、時間ができた時の片手間での調査も遅々として進んでいなかった2014年、偶然高島市朽木市場で「しこぶちフォーラム」が開催されることを知り、参加することにした。3月16日13時30分から17時過ぎまでで、講師による講演、記録映画上映、パネルディスカッションと、とても内容の濃いフォーラムだった。特に石田敏氏（高島市文化財保護推進委員会委員）による講演「安曇川流域の筏流しと林業遺構」は安曇川水系の林業や筏流しの歴史をはじめ、とても興味深いさまざまな話があり、メモするのに必死だったことを記憶している。幸いフォーラム会場で、石田氏による「安曇川と筏

流し」という本が販売されていたのを知り、迷わず手に入れた（＊3）。嶋田奈穂子氏（京都大学東南アジア研究所連携研究員）による講演「安曇川流域のしこぶち信仰」では、非常に多くの情報を得ることができ、またたくさん学ばせてもらった。それらをフォーラムで配布された資料と自分のメモを頼りに、また末尾に記した参考文献をも参考にシコブチさん関連の情報を整理するつもりで、その2として次回に書くことにした。

次回、安曇川水系流域のシコブチさん その2 に続く。

＊1： 京滋 びわ湖山河物語 澤 潔 文理閣

＊2： 雪の京の廃村と 6 番目の取材旅 京都府京都市左京区大原大見
(<http://heyaneko.web.fc2.com/zsw19.html>)

＊3： 安曇川と筏流し 石田 敏 京都新聞出版センター

2025 年の飼育網室内オオムラサキの羽化数とその性比について

大原のオオムラサキを守る会

1. はじめに

2013 年に飼育網室での累代飼育に成功してから 13 年目になる。羽化数の統計を取り始めたのは 2016 年からであった。各年の羽化数は、次年度の累代飼育の成功を占う重要な要素である。今年の羽化数は、非常に好調であった過去 2 年間に比べて、次年度に向けて不安な要素を含んでいると思われたので、その対策と共に報告する。

2. 羽化数カウントの方法

飼育網室内での羽化は、以前は 6 月中旬から始まっていたが、近年は 6 月上旬から始まるようになってきている。羽化当初はほとんど摂食しないが、それでも羽化開始に合わせて給餌してきた。

羽化時の羽化数は、食樹のエノキが室内上部を覆っているので、正確にはカウントできない。それに代わる方法として、死亡して落下している個体を適宜拾い集めて集計することで、その年の羽化数とした。このとき、死亡個体の雌雄も記録していった。

3. 結果

調査日ごとの死亡個体数を表 1 に示した。ただし、6 月 21 日のオス 60 のうち、49 はこの日に行ったオオムラサキ観察会・放蝶会で放した数で、死亡個体数ではない。8 月 6 日のオス 1 も同様である。したがって、この表の数値は正確には死亡数と放蝶数の合計であるが、この数値を羽化数とみなす。羽化数の総計は 378 であった。このような調査方法は 2016 年から採用してきている。

2025 年までの羽化数の推移を図 1 に示した。このうち、2020 年と 2021 年は累代飼育に失敗

表1 調査日ごとの死亡個体数

月日	確認数	♂	♀	累計	確認者	備考
6月18日	18	16	2	18	小松	
6月20日	12	11	1	30	小松	
6月21日	63	60	3	93	小松	放蝶♂49
6月22日	6	3	3	99	小松	
6月24日	20	16	4	119	小松	
6月25日	1	0	1	120	小松	
6月27日	15	12	3	135	小松	
6月29日	3	2	1	138	小松	
6月30日	10	8	2	148	藤野	
7月2日	1	1	0	149	大友	
7月4日	16	14	2	165	小松	
7月8日	8	8	0	173	小松	
7月9日	51	43	8	224	大友	
7月10日	8	8	0	232	大友	
7月11日	30	23	7	262	藤野	
7月14日	17	10	7	279	小松	
7月16日	26	15	11	305	小松	
7月18日	4	3	1	309	木村	
7月20日	13	6	7	322	小松	
7月23日	18	8	10	340	小松	
7月25日	5	2	3	345	小松	
7月27日	4	0	4	349	小松	
7月29日	12	6	6	361	藤野	
7月30日	4	3	1	365	的場、木村	
8月1日	6	2	4	371	小松	
8月5日	2	1	1	373	藤野	
8月6日	4	2	2	377	藤野	1♂は放蝶
9月10日	1	1	0	378	小松	古い死亡個体の発見
	378	284	94			

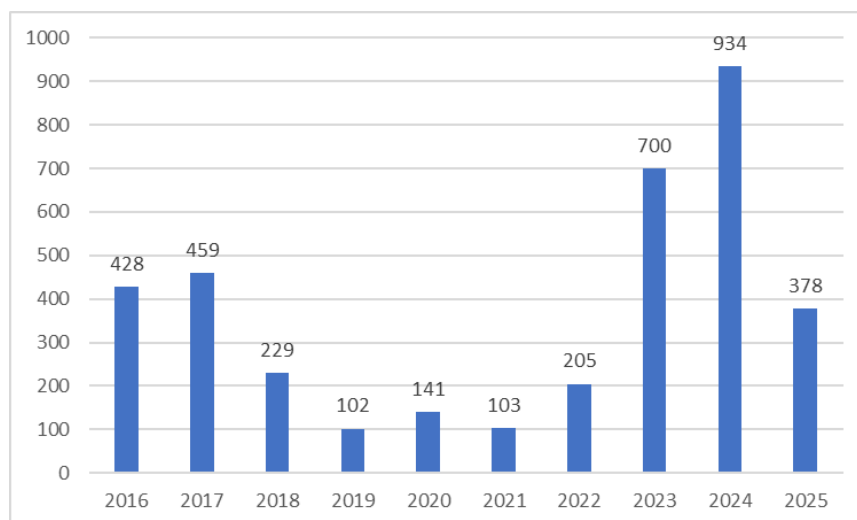


図1 羽化数の推移

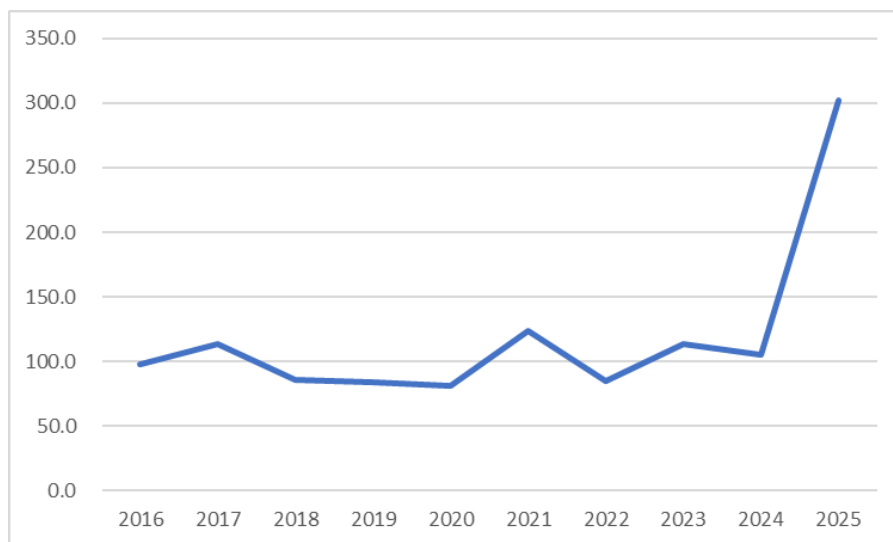


図2 性比の推移

した年で、羽化数は前年度の12月を中心に野外で採集した越冬幼虫を飼育した結果の数値である。

再び累代飼育が成功した2022年から3年間は羽化数が順調に増え始めた。これは飼育網室の網の目を細かくして、捕食者の侵入を防ぐ工夫が功を奏したことによる¹⁾。しかし、2025年は前年度に比べて大きく数を減らしたことがわかる。

次に性比について述べる。表1のように、2025年の羽化数378のうち、オスが284、メスが94で、性比は302.1となり、オスが3倍以上多い結果となった。ここでいう性比は（オスの個体数/メスの個体数）×100である。2016年からの性比の推移を図2に示した。2024年までの性比は2024年の報告²⁾にあるように、およそ100前後で推移していた。つまり、オオムラサキの羽化雌雄数はほぼ同数であると言えた。しかし、2025年は極端にオスの数が多かった。

4. 考察と対策

2025年は羽化数の減少と極端な性比の増加が見られた。これは自然で発生している普遍的な現象ではなく、飼育網室という半人為環境での特異な現象だと考えて、その原因を考察し対策法を述べる。

(1) 薬剤散布の影響

飼育網室のすぐ北側に梅園が広がっている。梅の収穫前に数回の薬剤散布が行われる。管理者からは、風向きを配慮して散布を行っていると言っているが、風向きは不安定なことが多く、これの影響の可能性は排除できない。

対策として、薬剤散布の影響が及ばない場所での飼育が必要である。それを考慮して2019年に当該網室の約50m南に第2飼育網室を設置した。しかし日当たりが不十分で、室内に植樹したエノキの生育が悪く有効に機能していない。日射を遮っている樹木の剪定が必要である。また、他所へエノキを植栽して、袋掛けによる飼育も考慮すべきである。

(2) 遺伝子的劣化

2022年に累代飼育を再開できて、同じ遺伝子集団での累代飼育が3年目となった。近親交配による遺伝子組成の多様性の減少が可能性として考えられる。幸いこれまでの保護活動が功を

奏しているのか、野外での個体数は少ないながらも安定的に維持している。冬季、野外から一定数の越冬幼虫を採集して、飼育網室内に放すのが遺伝子の多様性の回復に有効であると考えられる。

(3) 網室内食樹の葉の成分的劣化

飼育網室内の6本のエノキは飼育幼虫によって食い尽くされ、新芽が芽吹いてまたそれを食い尽くされるということが何度かあった。それでも枯れずに、この木の逞しさを感じずにはおられないが、目に見えなくても葉を形成する成分の劣化は生じていると考えるべきであろう。

それを防ぐために飼育網室内エノキに対する施肥がまず必要だが、飼育網室内での幼虫飼育は今後できるだけ少なくすべきであろう。そのためには野外植栽エノキの管理に力を注ぐ必要がある。とりわけ幼木に対するシカによる食害が著しいので、防御ネットの設置が不可欠である。また自生エノキに対しては適切な剪定を行い、容易に幼虫飼育用の網掛けを行えるようにする必要がある。

引用文献

- 1) 大原のオオムラサキを守る会：飼育網室内のオオムラサキ越冬幼虫数と羽化数一、大原の里と比良の山 3、3-4、2024
- 2) 大原のオオムラサキを守る会：羽化したオオムラサキは雌雄の数に違いがあるか、大原の里と比良の山 7、4、2024

(文責 藤野適宏)

チビのキマダラセセリとチビキマダラセセリ

藤野 適宏

1. チビのキマダラセセリ

2025年9月24日、大原の農道を歩いていると、花にとまっている小さなセセリチョウを見つけた。色彩・斑紋はキマダラセセリのようなのだが、飛び切り小さく「チビキマダラセセリのようなだ」と思った。その可能性を感じて、持ち帰って展翅した(図1)。残念ながらこのサイズの展翅は今の私には視力的・技能的に困難になっていて、見苦しい仕上がりになってしまった。

展翅したものを図鑑と絵合わせした結果は、キマダラセセリ以外の何ものでもなかった。それではどのくらいチビなのだろうか。大原文化センター保管の同種(採集者はすべて小松清弘氏)と比べてみた(図2)。真ん中がチビのキマダラセセリ、それを取り囲むように配置した4頭が大原文化センターのものである。それらの前翅長¹⁾は右上から時計回りで13 mm、15 mm、13 mm、15



図1 チビのキマダラセセリ

mmであった。それでは真ん中のチビの個体はというと12 mmであった。確かに小さい。小さいが飛び切りチビ、という感じでもない。一方で、「小学館の図鑑NEO 昆虫」によると、キマダラセセリの前翅長は12～15 mmとあるから、少し逸脱した小ささなのかもしれない。

2. チビキマダラセセリ

チビキマダラセセリは正式な呼び名（和名）である。実は私はこのチビキマダラセセリを採集し、保持している（図3）。採集したのは1978年8月3日の台湾高雄懸泥火山というところであった。13日間の自然観察ツアーに参加して台湾を一周、約80種のチョウを採集した。持ち帰ったチョウの種名は原色台湾蝶類図鑑（保育社）で知ることができたが、唯一、この種だけは知ることができなかった。その手掛かりとなるような図版さえ載ってはいなかった。新種の可能性を胸に秘めつつ年月が流れて、徐々に記憶から遠ざかっていった。

それから32年後の2010年の暮れ、ふと思い出して当時懇意にしていた大阪市立自然史博物館のK氏に写真を送ってみた。彼はすぐに返信をくれて、チビキマダラセセリであることを教えてくれた。個体数が多いわけではないが、東南アジアに広く分布するようだ。これで長年の謎は解け、新種の夢も消え去った。

またそれから15年、採集からは半世紀近く経った今年、模様や斑紋の特徴はおぼろげな記憶となったが、その小ささはしっかり記憶にとどまっていたようで、チビのキマダラセセリに出会って、チビキマダラセセリを再び思い出したのだ。それでは両者はサイズのどのくらい近いのだろう。両種を並べてみたのが図4である。前翅長でいうと“チビの”が12 mm、“チビ”が10 mmであった。“チビ”はいっそう小さいことがわかる。チビキマダラセセリは名前通りのチビであった。

しかし普通、もとなる種よりも小さい種であることを言い現わすときは、“コ”とか“ヒメ”を冠することが多いなかで、チビとはなんと乱暴な命名であろうか。考えるに、その理由は多分こうである。チビキマダラセセリが発見されたときは、すでにコキマダラセセリやヒメキマダラセセリは存在していたのだ。つまり“チビ”は小さい種を言い表す3番目の用法ということになる。

- 1) 前翅長（ぜんしちょう）とは、昆虫のどちらか片方の前翅の付け根から翅頂（しちょう）までの長さを指す。チョウの特徴を理解するために重要な要素である。



図2 文化センター保管個体との比較。
中央がチビのキマダラセセリ



図3 チビキマダラセセリ



図4 左：チビのキマダラセセリ
右：チビキマダラセセリ

<9 月おもな活動の報告>

◆10 月 1 日 (水) 10:00～ (報告者：奥谷)

○参加者 藤野、塩尻、的場、大友、奥谷、計 5 名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容
②学校との打ち合わせの報告 (藤野)
マーキング会；10 月 20 日以降に実施
ワークショップ；文化 C に於いてマルシェと抱き合わせで実施
牧野先生の来年度の動静
③セブンイレブン助成金；申請書作成－分担を決めて担当する
報告書の提出－活動画面ごとに写真が必要
④お世話になっている方へのお礼
- ・ 作業 ①網室内エノキの幹の周囲に畔シートを設置 ②網室内の除草
③フジバカマ園に散水 ④ロウバイの幹の切断

◆10 月 7 日 (火) 10:00～13:10 (報告者：大友)

○参加者 大友、小松、村上、藤野、計 4 名

○活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆10 月 8 日 (水) 10:00～ (報告者：小松)

○参加者 藤野、塩尻、的場、大友、村上、木村、小松 計 7 名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容
②駐車場について (藤野)－大原学院教職員の駐車場が使えるようになった。
③セブンイレブン助成金－2026 年度申請計画、報告書の購入物品と使用場面 (分担)
- ・ 作業 ①ルートセンサス ②網室周辺のエノキ等の剪定
③網室横のロッカーの整理 ④飛来アサギマダラのマーキング

◆10 月 15 日 (水) 10:00～、11:00～ (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計 8 名

10:00～ 網室

- ・ 会議 ①本日の活動内容 ②11:00 からの打ち合わせについて
- ・ 作業 ①幼虫管理 ②アサギマダラ標識活動 ③剪定枝の処理

11:00～14:00 文化センター

- ・ 打ち合わせ会 (別紙参照)
①セブンイレブン助成金 2026 年度の申請、分担
②セブンイレブン助成金申請作業の状況
③特別展示、ワークショップ
④大原学院のアサギマダラ標識活動；学院との打ち合わせ

◆10 月 17 日 (金) 10:00～ (文化センター)、17:00～ (梅小路公園) (報告者：藤野)

○参加者 大友、小松、藤野、的場、計 4 名

○活動内容：フジバカマと和の花展出展前日準備

◆10月18日(土) 10:00～15:00 (梅小路公園) (報告者: 藤野)

○参加者 大友、小松、藤野、計3名

○活動内容: フジバカマと和の花展出展1日目

◆10月19日(日) 10:00～15:00 (梅小路公園) (報告者: 藤野)

○参加者 的場、小松、藤野、計3名

○活動内容: フジバカマと和の花展出展2日目

◆10月23日(水) 10:30～、13:30～ (報告者: 奥谷)

10:30～ 大原学院、網室

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計8名

・大原学院アサギマダラマーキング会 (別紙参照)

対象: 大原学院5年生

①講義「アサギマダラの旅を調べよう」 ②実習「アサギマダラのマーキング」

13:30～ 網室

○参加者 小松、的場、大友、村上 計4名

・作業 ルートセンサス

【あとがき】

今年の南下時期のアサギマダラの大原での初標識は10月1日であった。初標識が10月にずれ込んだのは、記録を取り始めた2016年以来のことである。おまけに2回目の標識は10月8日までなかった。しかしそれ以降は順調な飛来があり、昨年の総標識数83を大きく上回ることとは確実であった。ところが10月26日以降、にわかに寒くなってすっかり飛来が止まった。

年々、アサギマダラの移動に適した秋の到来が遅く、冬の足音が早く聞こえるようになってきている。アサギマダラは早めに上空を通過するなどして、この変化に対応しているのであるうが、アサギマダラの飛来を心待ちしている私たちにとっては寂しいことである。(藤野)

＝ 目 次 ＝

安曇川水系流域のシコブチさん	その1	1
2025年の飼育網室内オオムラサキの羽化数とその性比について		4
チビのキマダラセセリとチビキマダラセセリ		7
10月おもな活動の報告		9
あとがき・目次		10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会 2025年11月10日 第20号

大原のオオムラサキを守る会 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町54 小松清弘

蓬莱むしの会 〒520-0105 大津市下坂本1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原21-151 藤野適宏